

地元で働き、暮らすという選択 Uターンした若い世代のリアル ～鶴岡高専卒業生の場合～

全国的に地方都市では、少子化の進行に伴う人口規模の縮小、若い世代の地元離れが地域課題となっている。進学や就職で地元を離れて暮らす若者が増加している現状はあるものの、中には、郷里への愛着や帰郷意識を持ってUターンし、培った職能や経験を生かして活躍している人も多い。2026年の座談会では、鶴岡工業高等専門学校の卒業生で地元就職やUターンを選んだ方々を招き、職業選択や就職活動の体験、地元帰郷の経緯、郷里での暮らしの魅力などを語り合っていた。出席者は、機械工学科（現・機械コース）卒の石井智久さん（石井製作所代表取締役、制御情報工学科（現・情報コース）卒の原田あすかさん（鶴岡高砂製作所）、物質工学科（現・化学・生物コース）卒の佐々木伸啓さん（フエルメクトス）、電気電子工学科（現・電気・電子コース）卒の佐藤智也さん（鶴岡高専助教、鶴岡高専創造工学科教授で地域連携センター長の斎藤菜摘さん（順不同。前半の話題は、鶴岡高専を選んだきっかけと学び、就職活動の体験など。

農機開発と事業支援に注力



いしい ともき
石井 智久 さん

1988年酒田市生まれ。2009年に鶴岡高専機械工学科（現・機械コース）を卒業。11年に長岡技術科学大学環境システム工学科を卒業。13年に同大環境システム工学科の修士課程を修了。同年、農業機械の開発販売を手掛ける家業・石井製作所に入社。15年6月から代表取締役

―それぞれ自己紹介をお願いします

石井 私には酒田市の新堀というところに生まれました。

鶴岡高専では、機械の設計や工学を学び、流体力学を研究しました。長岡技術科学大学・大学院では環境システムを専攻。農家さんたちと一緒に農業分野で技術研究を4年間させていただきました。石井製作所は農業機械のメーカ

―で、僕は4代目の跡取り。代表なので経営がメインですね。農業系のいわゆる商用化技術というところで、新しい直時きや密苗といった技術を開発したり、地元の企業さんと連携して農機を作ったり。最近は農林水産省のスタートアップメンターという仕事もしており、地域内外で農業系ベンチャーの立ち上げや事業再生の支援に、自分の事業と

並行して取り組んでいます。

佐々木 私は、医薬品や医療機器の製造販売をしている日東電工の東北事業所に就職。品質保証の部門で勤め、4年ほど前に実家に戻ってきました。今まで培ってきた経験を生かし、フエルメクトスに在籍。品質保証関連の業務を担っています。フエルメクトスは、大豆や小麦粉などを代替する食品原料として納豆菌から作ったタンパク質や加工食品を開発生産しているスタートアップ企業です。パン、クッキー、麺などがあり、小麦粉の一部を代替するパターンもありますし、100%を代替するのもあります。大阪万博にも参加しまし

鶴岡工業高等専門学校

1963年に創立された国立の高等教育機関。確かな技能を求められる工業系技術者、高度化・ハイテク化していく科学系分野で活躍できる人材を養成し、地域内外に輩出している。基礎と専門的な実践技術を身に付ける5年間の本科、発展的に学んで大学修了と同レベルの技術者教育を受ける2年間の専攻科を開設。本科では、1年次は創造工学科に所属し、2年次に機械、電気・電子、情報、化学・生物の4コースから選択して学ぶ（2017年度に機械工学科、電気電子工学科、制御情報工学科、物質工学科より改組）。25年度には新たにデジタルデザインコースが開設された。専攻科には機械・制御、電気電子・情報、応用化学の3コースを設けている



ささき のぶひろ
佐々木 伸啓 さん

1995年鶴岡市生まれ。2016年に鶴岡高専物質工学科(現・生物・化学コース)を卒業。18年に同専攻科の応用化学コースを修了。同年に日東電工株式会社に入社し品質保証部門に配属。22年にフェルメクテス株式会社に入社し生産管理や品質保証の体制構築に携わっている

納豆菌粉で食糧課題に挑む

鶴岡高砂製作所は、電気自動車などの開発段階で使われる試験・評価用電源装置を手がけています。電気自動車を取り巻く環境は変化が大きく、将来の方向性が注目されている分野です。当社はその中で実用化に欠かせない検証やテストを支える立場として関わり、安全性や性能を確認

する重要な工程を担っています。Hondaで身に付けた生産管理の考え方を、現在の職場での業務に合わせて生かしながら働いています。佐藤 電気電子工学科に2009年に入學し、専攻科では燃料電池の作動温度の低温化に向けた研究を行いました。東京工業大学(現・東京科学大学)に進学し、圧電体材料の結晶構造解析をテーマに研究。その後、就活を経てJR東日本の総合職として入社しました。今年4月から母校である鶴岡高専の教員として働いています。新卒採用や若手育成を担当する部署での経験は、教育という面で今につながっていると思います。齋藤 私は出身が群馬県です。大学の薬学部を卒業し、薬剤師の資格を取得。就職氷河期の中で就活に苦戦していたところ、大学で所属していた研究室で助手として働くチャンスを得ました。大学院に

自動車産業に関わりたい



はらだ あすか
原田 あすか さん

1998年酒田市生まれ。2018年に鶴岡高専制御情報工学科(現・情報コース)を卒業。同年～22年まで本田技研工業株式会社に在籍し生産管理業務。24年に鶴岡高砂製作所に入社し、生産管理部に配属

進学、在籍しながらつくば市の食品総合研究所で支援研究員として研究をして博士の学位を取得。その後、慶應義塾大学先端生命科学研究所の特任教員として鶴岡に赴任し、10年間研究と教育に携わりました。そこでいろいろな人とつながり、鶴岡高専に来ることができて現在に至ります。

私の研究の専門は微生物です。環境微生物を分離する技術や、それを利用する技術を学生と一緒に作ろうとしています。見つけた微生物を農業や食品などの産業分野に利用できるようにしたいので、企業や大学と共同研究しながら社会実装を目指しています。

——鶴岡高専を選んでくださいや理由を教えてください

佐々木 私の場合は中学3年生の時、高校の説明会で初めて知りました。話を聞くと理系に関するところを深く学べるということで、自分の中では理科系が好きな分野で、

反対に文系は苦手だったので候補に挙がりました。

佐藤 私もです。歴史などの文系科目には苦手意識がありました。理系科目は興味を持って学んでいました。親が電気関係の仕事をしているというところもあり、高専を選択しました。

原田 私は入学してから特殊なタイプだったと気付いたんですけれども。中学の時から自動車業界で自動運転などの研究開発をしたいという気持ちがありました。それに一番近いのはどこなんだろうなと思った時に、普通高校よりは高専に行って就職という道の方がいいのかなと考えました。実際に近道だったかどうかはさておき、それが一番最初のきっかけでした。あと、寮があったこと。私も酒田出身なので、寮生活ができるのがかなり魅力的でした。さらに言えば、女子の制服がかわいいと感じましたね。

総合職経験生かし教職へ



さとう ともや
佐藤 智也 さん

1994年鶴岡市生まれ。2014年に鶴岡高専電気電子工学科(現・電気・電子コース)を卒業。16年に専攻科の同機械電気システム工学コースを修了。18年東京工業大学(現・東京科学大学)物質理工学学院材料系を修了。同年に東日本旅客鉄道株式会社に入社。秋田車両センター、奥羽本線・田沢湖線の車掌、若手社員の育成などを担当。25年に鶴岡高専創造工学科の電気・電子コース助教に就任

石井 寮の存在は私にとっても大きかったですね。小さい頃から「石井製作所の跡継ぎ」という看板を背負っていて、そういう見られ方や扱いを感じてきたことで、自分自身の価値がよく分からずにいました。あと、中学の時に人間関係で悩んだこともあって、そこで周りの友達が行かない学校を選びたい、親元を離れたい、と。自分の力で生きるというか、周りを気にせずにトライできる環境だと思ったのが高専だったんです。

斎藤 高専と、高校や大学とではどんな違いを感じましたか？

石井 進学校と比べた場合、大学受験やセンター試験、今は共通テストですか、それがなくて。もちろん何かに追われるから頑張れるっていうところもありますけれどもそれ以上に、5年間で腰を据えて何か興味のあることに取り組めるっていうのは良かったと思いますね。大学受験

はないけど、専攻科があって、行きたい人は他大学や大学院に編入学もできるのは強みだと思います。

原田 大学受験のためだけに知識を蓄えるのではなく、いろんな実験や経験ができる自由さでしょうか。もちろん授業のレポートや提出物は常にあるんですけども、日常的に何か楽しめる環境があるのがすごくいいところだったかな。私は学生会に入ってから高専と交流したりもしました。東北の各高専出身の友人がいて、今でも集まったりつながりが続いています。

佐々木 他、高校の友達からよく聞くのは設備のことで。実際に社会で使う機材や機器があつて、触れる機会が多いのは、他と違うのかなと感じます。私は前職で業務に入る時に、設備機器に関する基本的な知識があると、業務の理解の速さや進め方がだいぶ違うことを実感しました。斎藤 たしかに。高専の教

員は研究者でもあるので、大型の外部研究資金を獲得して設置した特殊な専門的機器があります。これは高校と大きく違うところ。学生が卒業研究で受託研究に参画したり、地域課題をテーマとした研究を通じて地域と関わることも高専の特徴だと思います。

原田 私は専攻科には進んでいないのでそんなに深い研究はしてないんですが、それでも研究室に1年半いて卒業研究を発表したっていうところ、何か一つのことを成し遂げられたというのが大きいです。高専卒は就職時に、大学の学部卒と同様の業務に配属されることが多く、実践的な専門教育を生かして周囲と同じ目線で仕事に向き合っていました。理系分野を中心に学びましたが、生産管理では、文・理それぞれの強みを生かせる業務に携わっています。

斎藤 高専では、4年生の後期から研究活動が始まります。大学1年生と同等の年代になります。研究活動の中では自分で考えなければならず、データの整理やプレゼンテーションの機会も多くなります。5年生や専攻科では学会で発表するチャンスもあります。研究を早い段階から始

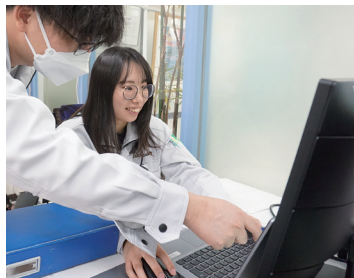
めることが学生の成長を促していると感じます。

——高専は高い就職・進学率、安定した進路に定評があります。職業選択、就職活動の体験を聞かせてください

佐藤 私は、高専の頃から就職はほとんど考えていなくて。高専は就職に強いというイメージを持たれますが、同時に高い専門性や幅広い経験を得ることができるため、進学にも有利だと感じていました。特に専攻科まで進むと、研究レベルや業績を含めて大学生以上となることから、3年生の時には視野に入っていなかった大学への進学を目指せるようになりました。そこは高専時代に研究・勉学ともにコツコツと積み上げてきて良かったなと感じました。就活では、軸を何にするか悩みましたが、どちらかというと任せられた仕事をしっかりと責任感を持つてやるっていうタイプ。そういう意味ではインフラ系の仕事は自分に合うんじゃないかと思う、鉄道・航空・電力系、インフラ設備に関わる電機メーカーなどを中心にエントリーしました。その中でどの企業に就職すべきか本当に悩みましたが、小さい頃から電車は好きでしたし、経営的視点を身に付け、



農機展示会にて。秋田で海外農機を扱う商社の担当者と共に



普段はデスクワークが中心。でも現場で何かあればいつでも駆けつけます



納豆菌粉末の委託生産にあたり海外への出張もある。任されて企業訪問した時には責任の重大さを感じる

会社とともに私自身も成長できるフィールドが整っていると感じたことから最終的にJR東日本に決めました。

佐々木 私は、求人票で興味があるところを片っ端から集めて、あまり地元から遠く離れたくないなと思いながらみていました。学んできたことを生かせる仕事、生物学寄りの物質工学に何かの形で関われる企業がいいなと、ふわつとした感覚で探しました。

斎藤 指導教員だった立場から申し上げると、佐々木さんは就職活動に割と苦労していました。というのも専攻科には、ものすごくたくさんの方を求人をいただいているんです。昨年だと726社からいただき、求人倍率は52倍でした。自分がどういう仕事をしたいのか、「絶対ここがいい」という信念のようなものがないと、求人の中からどうやって、何を決め手に選んだ

高専の学びは課題解決力育む



さいとう なつみ
斎藤 菜摘 さん

群馬県出身。1996年に同邦大学薬学部薬学科を卒業。2003年に同大学院薬学研究科博士課程を修了。同年に慶應義塾大学・先端生命科学研究所特任教員、13年に鶴岡高専物質工学科准教授。24年に同創造工学科教授。25年から副校長、地域連携センター長。研究テーマは環境の未培養微生物の探索、食品主原料として利用可能な「納豆菌粉」の開発

らしいのか分からなくなってしまうのです。

石井 私の場合、家業を継ぐということは自覚していました。なので高専を通じて、職人として生きることができるようになったと自信ができました。工場の機械を全部使えたり図面を描けたり。大学と大学院では、農業と経営の勉強をしながら事業化をいろいろ実践しましたね。大学寮の中で家電修理を請け負った

ら、部品の調達が大変で儲からないとか、自動車が欲しい留学生たちに通訳しながら購入を仲介してみたり。何を言いたいかというと、問題解決

能力が身に付いたということ。普通だったらできないとか、やめようかと諦めちゃうところを、高専生はアイデアと技術でどうやったらできるかと考えられる。この思考は経営者としてめちゃめちゃ生かされていると感じます。

斎藤 概してそういう学生が多い気がしますね。鶴岡高専には学生が育つ環境がある。それぞれの専門の研究やコンテストなどで、装置や材料を作ったり分析したり、手を動かしながら考える場面が多い。そんな環境で鍛えられるので、直面した課題を解決しようという力が養われるの

だと思っています。

原田 就職の時期に張り出された求人票に私が入りたい会社はありませんでした。きつと高専には求人が来ない分野や業種、職種があります。そこで私は研究室の先生に「この会社に入りたいんですが、どうしたらいいですか？」と尋ねました。そうしたら求人出してもらえように掛け合ってくれて。それで無事に応募できたんです。先生の協力はかなり重要かと。

高専は就職率100%と言われており、実際に求人も多く寄せられます。卒業までに全員が内定を得られるという意味では心強い環境ですが、必ずしも第一志望の内定が100%というわけではありません。希望どおりの進路を実現するためには、学校推薦があるからと安心しすぎず、自分自身でしっかり準備することも大切です。学校推薦の1社の選考が長かったりしてもし落ちてしまったら、2社目を探す時には数が減っているでしょう。私も選考結果が出るのが遅かったため、落ちてたらどうしようって不安に思いつながってましたね。

「次号につづく」

地域の技術力と高専の知をつなぎ、次の時代へ。

鶴岡高専技術振興会は、高専と地域企業との連携を促進し、
地域の産業発展に向けて研究教育活動を支援します。

【地域企業連携強化事業】

- ・産業技術フォーラム：最新技術の共有
- ・地域企業と高専が参加する研究活動への支援
- ・技術相談・企業訪問：現場の課題解決をサポート
- ・ものづくり支援：セミナーを通じた人材育成

【研究開発推進・学生支援事業】

- ・学術研究と教育活動の充実発展に対する支援
- ・市民サロン：高専の教育研究をわかりやすく紹介
- ・学生のものづくり研究や学会等への参加支援



新入会員
随時募集中
会員数190社

(2025年12月末)

◀ 鶴岡高専技術振興会のWEB サイトです。事業の詳しい内容や入会案内がご覧いただけます。

【情報提供事業】

- ・鶴岡高専の研究PR活動

鶴岡高専 **Uターン** サイト
OB・OG専用

地元採用の新ルート。
鶴岡高専OB・OGに直接届くUターン求人。



◀ 会員企業による鶴岡高専OB・OG限定の中途採用求人情報を掲載。ユーザー登録をしてご利用ください。

鶴岡高専技術振興会

事務局 / (公財)庄内地域産業振興センター内 TEL.0235-23-2200 (代)
〒997-0015 山形県鶴岡市末広町3番1号 FAX.0235-23-3615